

# 被災地の子どもたちの運動不足改善に関する施策

～学校へのエア遊具の設置～

桜美林大学 澤井ゼミ C

○森涼子 荒田夏鈴 大平真央 中村隼 細野浩太 村元優成

## 1. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災によって東北地方は壊滅的な被害を受け、家を失った人々は仮設住宅での暮らしを強いられているが、その仮設住宅は学校の校庭、公園に建てられていることが多いため、子どもたちが運動やスポーツをする場所が奪われ、運動不足や肥満に陥っていることが問題となっている。また、岩手、宮城、福島3県で東日本大震災当時に保育園児だった子どもは、暴力や引きこもりなどの問題行動があり、精神的問題に関する医療的なケアが必要な子が4人に1人に達するとされている(毎日新聞 2014年1月27日)。そこで本研究では、被災地の子供たちの運動不足を解消し、こうした子どもたちのさまざまな問題を軽減できるような施策について検討する。

## 2. 方法

### 2.1 現地調査・参与観察

本調査チームのメンバーがそれぞれ被災地の子供たちの支援活動への参加や視察を行い、実態に関する情報収集と課題の検討を行った。

- ① 2014年7月5日に岩手県陸前高田市の小学校の子どもたちと体育館でフットサルをするという活動に参加した。この活動は半年に一度同じ学校を対象に行われており、自身の参加は今夏が三度目となる。現地の子供たちは私たちが来ることをとても楽しみにしてくれているらしく、毎回楽しくボールを蹴っており、子供たちも本当は遊びたがっていることが見受けられた。また、学校外に目を当てると、陸前高田市はかさ上げが行われており、子供たちの遊び場不足は一目瞭然である。
- ② 東日本大震災で被害を受けた福島県の子供たちを対象に、2014年8月4日から8日にかけて長野県茅野市にある太陽館を会場として、芸術家グループ「やまんB・art 実行委員会」との共催で「高原夏のアトリエ 2013」を開催した。4泊5日のキャンプに参加した福島県に住む小学4年生～中学1年生、合計14名の子供たちは日々盛りだくさんのプログラムを生き生きとした笑顔を見せながら体験してきた。
- ③ 2014年8月12日に津波の影響のあった福島県いわき市の岩間町に行き、現地の状況を視察した。防波堤はほとんど壊されており、津波の恐ろしさを改めて痛感した。家のあったところは草が生えていて、野晒し状態であった。しかし、がれきは一か所に集められ、防波堤も基礎のようなものができており、少しずつでも復興が進んでいるなとも思った。そういった草が生えている地を、子供たちの遊び場に活かせるのでは

ないかと思った。

## 2.2 インタビュー

(1) 新雅史さん（社会学者）（日時 6月17日）

「大震災後の社会学」（講談社、2011）などの著書があり、定期的に被災地でフィールドワークを行っている社会学者の新雅史氏に現状の問題点などについて話を聞いた。

(2) (財) 日本サッカー協会「夢の教室」スタッフ I さん（日時 8月5日）

JFA が主催する「夢の教室」のスタッフとして被災地の子どもたちを観てきた I さんに現地の子どもの状況などについて話を聞いた。

(3) NPO 法人かながわ 3.11 ネットワークで被災地支援をしている I さん（日時 8月7日）

NPO で活動し、被災地にボランティアバスなどを出し続けている I さんに話を聞いた。

(4) 被災地支援をしているまちづくりコンサルタント T さん（日時 10月8日）

まちづくりのコンサルタントであるとともに大学院でまちづくりについて研究しており、定期的に被災地に通って調査している T さんに話を聞いた。

## 3. 結果

### 3.1 フィールドワーク

- 子どもたちにとって、体を思い切り動かせる環境というものは、とても大きい。特に精神面への影響が大きいと思われた。2.1②のプログラムでは、体を動かすことを子どもたちはとても喜んでいるようで、子どもたちやその保護者の方々からこんなに思いつき体動かしたのは久々であり、子どもたちのこんな顔も久々に見たとおっしゃっていて子どもたちが体を動かすことの大切さを感じた。
- 運動不足の解消も大事だが、子どもにとっては精神面の充足もとても大事。特に「楽しさ」が大事と思われた。
- 整備されていないが、遊び場となりそうな場所はある。

### 3.2 インタビュー調査

- 震災が起きたことによって、避難所や仮設住宅の場所となった体育館やグラウンドが使えなくなり、子どもたちの遊び場がなくなってしまった。
- 仮設住宅では音が響くため、子どもが大きな声を出して遊ぶことができない。
- 仮設住宅の設置期間は2年のはずだった。しかし仮設住宅の取り壊しが予定より大幅に遅れているため、校庭などが使えずに遊び場がない状況がこれからも続くと思える。
- さまざまな NPO 団体が子どもの遊びやスポーツをサポートする事業を行っている。たとえば、ある NPO 団体はトラックの移動公園事業を行っている。
- NPO 団体によるイベントは非日常的である。それはそれで意味があるが、日常的にどのように子どもに体を動かせるかを考える必要がある。

- 被災地の学校では学校外の代替施設で部活を行う場合もあり、それすら用意できない場合は部活すらできない状況である。また、グラウンドが使える場合も今度は中学高校の運動部活動があるため、小学生が自由に遊べる空間が非常に限られている。
- 特に避難先から登校している生徒は学校のスクールバスで登下校をしている。そのため、子どもの遊びの時間や部活の時間がスクールバスの発車時間に左右されてしまっている。
- Tさんが被災地の小学生にやってみたいことを聞いた結果、友人と時間を気にせずに遊びたいということだった。
- 公園やスポーツ施設など整備された場所はないが、「自然」はある。しかし、自然は危険が伴うので大人の監視が必要。それが親の負担となってしまう。(親は仮設暮らしもあり大きな負担感を感じている)

#### 4 分析

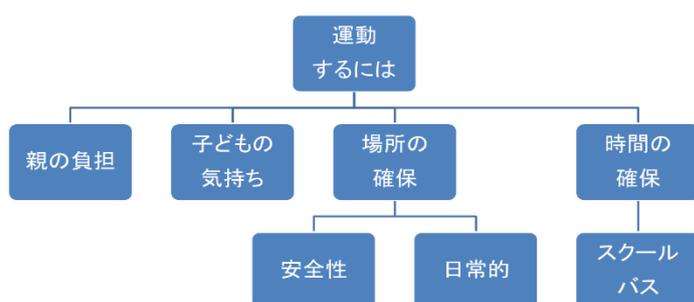


図 1. 運動不足解消のために考えなければならない問題

#### 5 政策提言

以上のような調査結果を考慮し、本研究では次のような政策・施策を提言したい。

##### 「学校の校庭等への『エア遊具』の設置」

特に小学生以下の子どもの遊び場と心身共に充実した時間の確保を目的とし、学校の校庭にエア遊具を設置して放課後子どもたちが自由に遊べるようにする。特に避難所生活の子どもを考えると、設置場所は学校か避難所の近くしかない。場所を取らず、見守る人のコストとリスクの少ない設備で、より運動量があり、かつ子どもが喜ぶ設備としてエア遊具は最適と思われる。

必要経費は、スポーツ団体・競技団体からの寄付金を募る。現在さまざまな競技団体やスポーツ関係者、企業が被災地を訪問する支援事業をしているが、その予算の一部をエア遊具の設置に充ててもらおう。競技団体として



は社会貢献と共に競技普及の一環として捉えることもできる。(写真：アメリカンフットボール会場におけるエア遊具使用の例)

学校内で完結できる遊びであり親の負担を軽減し、設置期間中は日常的に利用が可能となる。エア遊具は基礎工事等が不要で扱いも比較的容易なため、限られたスペースで、低コスト低リスクでの運用が可能である。ドーム型であれば子供の歓声も周囲に響きにくいいため、思いっきり遊び楽しむことができ、更に高い安全性も期待できる。何よりこどもの笑顔が見られるという大きな効果が期待される。(写真：ドーム型エア遊具の一例)



## 6 参考資料

- 毎日新聞 2014年9月9日 「校庭の仮設：撤去0.6% 子どもの体力低下 岩手・宮城」
- 毎日新聞 2014年1月27日 「東日本大震災：引きこもりや暴力・・・被災園児25%問題行動」
- エア遊具 Wikipedia contributors. "エア遊具." *Wikipedia*. Wikipedia, 6 Aug. 2014. Web. 17 Oct. 2014.